OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	高昌故城
Author(s)	荒川, 正晴
Citation	月刊しにか. 1996, 7(1), p. 68-69
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88454
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

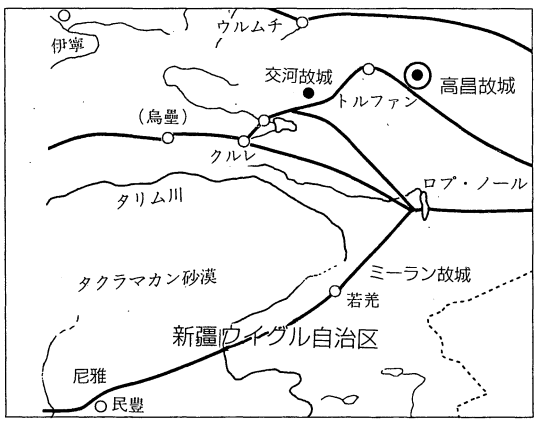
【特集】
▼
中国主要遺跡ガイド

高昌故城（こうしょうこじょう）

高昌故城は、カラ＝ホージャやイディクート＝シャーリとも呼ばれる、トゥルファン盆地最大の都市遺跡であり、漢人植民国家の高昌国、唐の西州、西ウイグル王国と、それぞれの時代における中心都城として長期間にわたって栄えてきた。

前世紀末よりはじまる各国の中央アジア探検隊のうち、高昌故城を初めて訪れたのはロシアのクレメンツ（一八九七年）らしいが、本格的に調査したのはグリュンヴェーデルやルコックが率いたドイツ隊が最初である。その後もイギリスのスタインや日本の大谷探検隊などによって調査されており、中華人民共和国成立後も中国隊によって調査が行われている。

高昌故城は、現在、外城・内城・宮城の三区域に分けて説明されることが多く、内城は周囲約三・五キロメートル、外城は周囲約五キロメートルの規模をもっている。東トルキスタンの城邑のなかでは、亀茲（きじ）（クチャ）故城に次ぐ大きさであり、外城には馬面（敵台・楼台）や城門（西壁二門〔北側の門は甕城を具える〕、北、東壁各二門、南壁三門）を具えている。『隋書』巻八三西域伝高昌の条に「其の都城は、周廻一千八百四十歩」とある記事は、麹氏高昌国（きくしこうしょうこく）当時の高昌城の規模を推定する際に拠るべき唯一の貴重な史料となっているが、これは現在の外城の規模には及ばず、隋時の高昌城はなお大分小さかったことになる（一歩は隋で六尺、唐で五尺、一尺を隋で二九・五一センチメートル〔開皇官尺〕、唐で三一・一センチメートル程とすると、一八四〇歩は、隋制では三二五七・九メートル、唐制では二八六一・二メートルとなる）。もしそうだとすれば、その後、故城の規模が拡大したことになるが、その契機として最も注意されるのは、六四〇年に唐の西州経営が開始されることであろう。唐は、トゥルファンに西州を設置したばか、りかここを鎮守軍兵が駐屯する前線基地とし、高昌城をその治所としたからである。加えて、「在京及び諸州の死罪の囚徒を西州に配して戸となす」（『旧唐書』巻三、太宗紀貞観一六年〔六四二〕正月条）など、まさに「高昌の旧民は鎮兵



及び謫徙者と西州に雑居す」（『資治通鑑』巻一九六、貞観一六年〔六四二〕九月条）る状態となったのである。後には天山軍（管兵五〇〇〇人、馬五〇〇匹）が西州城内に設置されており、言うまでもなく高昌城内にも多くの兵員が駐屯していたと思われる。西州期における一般戸口の増大とともに、これらのことは高昌城拡張を促す要因となったものと思われる。ちなみに、同時代の中国内地では、県城クラスの城

市で、周囲五キロメートルを超える規模のものは滅多にない。ただし外城が方形を成しているとはいえ、四面とも弧線を描くばかりか、西北の角が内側に凹み、東面北半部が外に向かって突出しているので、単純に外城が唐によって一時に構築されたわけではないことが知られる。

故城からは、仏教文献（写本・印本）や諸種の公文書を始めとする文書類のほか、絹・麻・紙に描かれた絵画（多くは幡画〔はんが〕〔はた〕。仏、菩薩の威徳を表わす荘厳具）あるいは壁画・彫刻類などが数多く発見されており、トゥルファンや中央アジアの歴史・宗教・美術研究に利用されている。

また故城には、ほぼ中央に「可汗〔かがん〕の宮殿」と呼ばれる遺址があるほか、数多くの寺院址（仏教を中心としてマニ教や景教も含まれる。ただし景教寺院址は城外にある）が散在している。寺院址は、四角い基壇の上にストゥーパを築き、それを長方形の壁で囲んだり、なかにはストゥーパを中心にして、四方にそれぞれ二五の小塔を配したものもある。この他、中国側の調査では、官庁址や市場・工房の跡も認められるという。必ずしもその跡は明確ではないが、当然それらが存在していたことは言うまでもなく、八世紀の天宝年間の文書によれば、当時の市場は、唐内地および外来の商品であふれており、城居する官人・商人・工人さらには農・牧民などの物資購入および製品販売を支える場として、その生活を豊かにしていた。ちなみに、麺（小麦粉）一斗は三六〜三八文で売り出されており、当時おおまかに大人一日二斗、一年七石三斗の穀物が必要とすれば、商工人などがそれを市場で購入するのに、単純に計算して、一年で一人当たり約二七〇〇文ほどが必要となる。これは、同じ市場でほぼ牛一頭を購入する価に近く、都市で一家の生計を維持してゆく苦労が偲ばれる。

（荒川正晴）

◆DATA
所在地…新疆ウイグル自治区・吐魯番地区・吐魯番市・三堡郷・哈拉和卓村
時代……紀元前後?〜一五・一六世紀?
参観……可